

[論文]

アメリカの公立小学校における Kindergarten と First Grade の教室環境の 比較

マサチューセッツ州の A 小学校における観察から

早坂 めぐみ
越川 葉子

A comparative study of classrooms between Kindergarten and First Grade at the
public school in the United States.

From observation at an elementary school in Massachusetts

Hayasaka Megumi
Koshikawa Yoko

キーワード：アメリカ、小学校、キンダーガートン、教室環境、移行期

Key Words : the United States, elementary school, kindergarten, classroom, transition

要約：本研究の関心は、幼児教育段階と初等教育段階の接続にある。とりわけ本稿では、アメリカの教育制度に着目し、日本の幼児教育と小学校教育のギャップの解決に向けた策を検討したい。米国の義務教育制度は「elementary school」から始まる。しかし、その様相は日本の「小学校」とは異なる。米国では小学校の1年目に「kindergarten」、2年目に「first grade」が設定されており、日本のように小学校の1年目を「1年生」、2年目を「2年生」とカウントする制度とは異なるのである。つまり、日本で「小1プロブレム」と呼ばれる移行期の問題が、米国においては「kindergarten」の段階で生じる可能性があるのではないかということである。

日本においては、生活科が小学校低学年に設定されるなど、教育内容の面での幼児教育と小学校教育との接続が試みられてきた。しかし、教室環境についての検討はあまりなされてこなかっただろう。他方、米国に目を移せば、小学校教育のなかに幼児教育段階の「kindergarten」の機能を含みこむ制度を有するばかりでなく、観察から「kindergarten」と「first grade」の教室環境の異同が明らかとなった。たとえば、筆者らが訪問した A 小学校では、First Grade と異なつて Kindergarten には 1) 教室内にトイレが設置されている、2) 教室の床には移動の際に整列するための目印となる表示がある、3) 家族の写真が掲示されているといった点である。これらには、子どもが学校生活に適応するための配慮が見て取れる。本稿からの示唆として、子どものスムーズな学校適応に向けての環境面での工夫のなかでも取り入れやすいものについては、具体的に小学校に導入していく価値があると考えられる。

1. 問題関心

本研究の関心は、幼児教育段階と初等教育段階の接続にある。日本では、幼稚園・保育園などの幼児教育機関から小学校への移行期に「小1プロブレム」と呼ばれる問題がある。それは、小学校1年生になった子どもたちの学校教育への適応がスムーズでないことから生じる問題である。つまり、子どもの視点にたてば、幼児教育と初等教育のあいだには何らかのギャップがあるといえる。日本においては、それを幼小連携として解決を図ろうとする向きがある。対して、本研究では、アメリカの教育制度に着目し、アメリカの「kindergarten」と「first grade」の教室で日常的に行われている教師と子どもの教育過程の詳細を明らかにすることにより、日本の幼児教育と小学校教育のギャップの解決に向けた策を検討したい。

では、なぜアメリカの「kindergarten」と「first grade」の教室を研究対象とするのか。アメリカの義務教育制度は「elementary school」から始まる。しかし、その様相は日本の「小学校」とは異なる。アメリカでは小学校の1年目に「kindergarten」、2年目に「first grade」が設定されている。日本のように小学校の1年目を「1年生」、2年目を「2年生」とカウントする制度とは異なっているのである。

周知の通り「kindergarten」の日本語訳は幼稚園であり、アメリカでも就学前教育に分類されている。しかし、筆者らは2019年3月にアメリカの小学校の授業を見学する機会を得て、「kindergarten」が実質的な学校生活の1年目となっているのではないかとの感覚を抱くようになった。アメリカでは、5歳児の84.6%が公立小学校に付設された「kindergarten」に入園するⁱ。また、州によって「kindergarten」を無償化の対象としていることから、アメリカでは「kindergarten」が準義務教育化しているともいわれている。つまり、日本で「小1プロブレム」と呼ばれる移行期の問題が、アメリカにおいては「kindergarten」の段階で生じる可能性があるのではないかということである。

以上のように、子どもたちにとって「kindergarten」での学校生活が、これまでとは異なる生活空間・生活形式への移行を伴う経験となっているならばⁱⁱ、「kindergarten」のクラスを受け持つ教師らは、子どもたちを新しい学校生活に導いていくための何らか実践上の工夫を行なっていると考えられる。日本とアメリカでは、学校生活の開始が小学1年生か「kindergarten」かの違いはあるものの、子どもにとってはそれ以前とは異なる何らかのギャップを経験していることには変わりないのである。

しかし、次のような疑問も浮かぶ。すなわち、「kindergarten」から「first grade」への移行はスムーズに行われているのだろうかとの疑問である。小学校の敷地内での学校生活は「kindergarten」から開始されているものの、初等教育段階1年目は「first grade」である。したがって、同じ小学校内の「kindergarten」で1年間を過ごしてきた子どもたちであ

っても、「first grade」への進級に際しては、新たな学校生活の変化を経験している可能性がある。そうであるならば、「first grade」の教師もまた、「kindergarten」とは異なる学校生活に子どもたちを導いていくための実践上の工夫をしている可能性がある。いわば、アメリカにおける幼児教育から初等教育の移行期の問題は「kindergarten」のみならず、「first grade」をも視野に入れて検討する必要があるのである。

ここで急いで付け加えておくと、アメリカと日本の公立小学校では、学校文化や子どもたちの人種構成、言語や宗教の問題など様々な違いが存在している。こうした違いを考慮せずに、比較研究を行うことは拙速であるとの批判もあるだろう。しかし、本研究が着目するのは、日本以上に多様なバックグラウンドを持った子どもたちが集まるアメリカの小学校においても、多くの子どもたちは小学校生活に慣れていき、その小学校の生徒(student)になっていくことにある。すなわち、アメリカの子どもたちは、どのようなやり方で授業場面や学校生活に適したふるまい方を身につけ、実践しているのか、また担任教師らは子どもたちをどのように学校生活へと導いていくのかを観察・記録していくことに本研究の関心はあるⁱⁱⁱ。

したがって、日本とは異なる制度と環境のもとで学校生活が始まるアメリカの学校内部で、どのように教室環境が構成され、教室内で何が起きているかをまずは注意深くみる必要がある。メハン (Mehan, H) は、学校教育が子どもに与える影響を理解するためには、実際の教育環境で行われる教育過程が教師や子どもによってどのように構成されているのかを検討していく必要があると主張し、その方法論上の立場を「構成的エスノグラフィー」と名付けている^{iv}。本研究は、メハンの立場に依拠しつつ、アメリカの「kindergarten」と「first grade」で展開されている日常的な教師と子どもの相互行為過程の詳細を明らかにしたいと考えている。本論は、その第一段階として教室の環境構成に着目することをまずは述べておきたい。

以上の問題関心のもとに、本稿では、アメリカの「kindergarten」と「first grade」の教室環境の観察を通して得られた知見を提示する。そして、幼児教育と小学校教育のスムーズな移行のための配慮について検討し、日本における幼小接続に関して教室環境の面での提案を行う。これにより、日本の幼児教育段階から小学校教育段階への移行について、教室環境というファクターを考慮する重要性を提起する。

(越川葉子)

2. アメリカの就学前教育の制度

2-1. 現状

アメリカの教育は、州の管轄であり、各州が州憲法に基づき独自の教育制度を定めてい

る。初等中等教育の制度の詳細や運用は、各州の学区 (school district) に委ねられている。初等中等教育の通算は 12 年間である。そのうち小学校は 5 年制、ミドルスクールは 3 年制、ハイスクールは 4 年制で編成されることが多い^v。

就学前教育は大きく 4 つのプログラムに区別される。幼稚園 (kindergarten)、保育学校 (pre-school, nursery school)、デイケア (day care)、ヘッドスタート (Head Start) である。このうち幼稚園と保育学校は、州や学区の教育委員会の管轄下にある教育機関である。

なお、マサチューセッツ州の学校制度は学区によって異なるが、日本の外務省の情報によれば、幼稚園 (kindergarten) は 1 年間、初等教育 (elementary education) は 1 年生から始まり、5 年生から 8 年生までのいずれかの学年まで、中等教育 (secondary education) は 6 年生から 12 年生まで (ただし、初等教育との組み合わせもあり得る) と定められており、高等教育 (postsecondary education) として「college」や「university」が存在する^{vi}。

アメリカにおいて学校教育は「K-12」と表記される。小学 1 年生の 1 年前に小学校施設にある幼稚園に就学することが多く、多くは 9 月 1 日の時点^{vii}で、5 歳になっている子どもが入園する^{viii}。そもそも K-12 とは「Kindergarten through twelve」の略で、小学校入学直前の幼児教育期から小学校の施設で学習させる 13 年間を通した教育課程のことである^{ix}。つまり、幼稚園から起算し、初等教育および中等教育の 12 年生までの計 13 年間のことを「K-12」と呼ぶ。

ここで本稿の趣旨に照らして重要なのは、アメリカにおいては、「小学校施設にある幼稚園に就学する」という仕組みが整っており、「幼児教育期から小学校の施設で学習させる」制度になっているという点である。文部科学省 (2016) によれば、アメリカの公立小学校には、小学校入学前に 1 年間の就学前教育を提供するための幼稚園クラスが「付設」されているのが一般的であり、5 歳で幼稚園クラスに在籍し、そのまま小学校第 1 学年に進級する^x。したがって、小学校という空間のなかに幼稚園 (kindergarten) があり、そこで 1 年を過ごしたあとに第 1 学年 (first grade) へと進級するという教育システムが、アメリカにおいては一般的であるということである。なお、公立小学校に「付設」された幼稚園は無償である^{xi}。

日本では幼稚園と小学校の敷地が隣接している事例や、「附設」すなわち附属幼稚園として小学校等と同系列として接続する事例はある。しかし、いずれも小学校の建造物のなかに幼稚園が設置されているわけではないだろう。ここに、日本とアメリカにおける、幼稚園と小学校の関係性の違いを見て取ることができるのである。幼稚園から小学校への移行や、幼稚園と小学校との接続の問題を検討する目的において、日本と異なる制度を形成しているからこそアメリカへの着眼には価値がある。

(早坂めぐみ)

2-2. アメリカの公立小学校における幼稚園併設の制度史

では、アメリカはどのような過程を経て、公立小学校に幼稚園を併設するようになったのだろうか。先行研究をまとめることによって、その制度史を概観する。

幼稚園は、ドイツにおいて 1837 年に、フリードリッヒ・フレーベルが設立したが、アメリカへはドイツ系移民の流入とともに紹介されるようになった^{xii}。アメリカにおける幼稚園の「草創開拓期」(1855-1870 年)は、フレーベル主義教育理論の影響を受け、ドイツ系移民の幼児を対象としたドイツ語会話幼稚園という特質を持っていた一方で、ボストンやニューヨークを中心とする東部の都心など一部の地域では、幼稚園設立の教育運動が展開した^{xiii}。

幼稚園の普及の背景には、移民のアメリカ社会への適応、すなわち「アメリカ化」(Americanization)という課題があった^{xiv}。幼稚園の「普及拡散期」(1870-1910 年)にあたる 1873 年に、ミズーリ州セントルイスにおいて、公立学校に併設されたアメリカ初の幼稚園が開設された^{xv}。上野(1995)は、アメリカの公立小学校に併設される幼稚園のことを「公立学校幼稚園」(Public School Kindergarten)と呼び、この制度形成に幼稚園教育の公教育性を見出している。セントルイスでの開設が直接的な契機となり、すべての幼児に対する教育の機会均等を保障するため、公共財政による無償教育として、幼稚園は公立学校制度の最初の階梯に位置づけられ、それが全国的な普及を見せた^{xvi}。また、「普及拡散期」には、幼稚園教育に関する各種団体がアメリカ国内で組織化された^{xvii}。

アメリカにおける幼稚園普及の背景には、幼稚園設立の運動があった。山本(1986)によれば、それには 2 つの特徴があった^{xviii}。第一に、社会改革や社会改良の手段として、幼稚園が位置づけられたことである。都市部の犯罪、病気、汚らわしい言葉遣い、誘惑、貧困、無知、無秩序といった社会問題、またそれを放置している子どもの親、特に移民の親子に対して、アメリカの習慣や規範を理解し尊重させる必要があった。第二に、遊びと仕事や、自由と秩序の両立の重要性である。幼稚園運動家は、遊びや自由の行き過ぎからくる無秩序状態を避けつつ、仕事や秩序に象徴される統制と従順からくる弊害を中和することを考えていた^{xix}。子どもが自由のなかにも必要な制限があることを知り、自発的に法と秩序に従うことのできる主体が目指されていた。その社会的背景には、家庭において十分な教育を受けられない子どもの存在、教育をしない親の存在があり、子どもの成長が社会の安定的発展のために最良の手段として捉えられていた。こうした社会的要請を背景に、アメリカにおいて幼稚園は拡大を見せた。

幼稚園が小学校に併設されるようになる積極的な理由として、教育の機会均等の確保のほかに、幼稚園教育の効果がある。1900 年のパリ博覧会での発表のために収集された幼稚

園教育に関するアンケートの結果、幼稚園教育を受けた子どもは、そうでない子どもよりもよりも、規律正しさやしつけについて、小学校教員によって高く評価された^{xx}。また、当時の別の調査では、学力面（手作業・表現力・語学力・想像力・計算）ならびに道徳面（規律正しさ・勤勉さ・清潔さ・忍耐強さ）における優秀さも認められた^{xxi}。幼稚園が学校教育制度の一部に組み込まれることによって、小学校教育への適応をスムーズにするとともに、「アメリカ化」によって社会を統一し、産業化するアメリカ社会で重視される労働効率性を高めることが期待された。しかし、他方で、幼稚園設立運動家のなかには、子ども期における効率性重視の考え方に対して批判を投げかけ、幼稚園が小学校に内包されることによる弊害、幼稚園教育の特徴が失われることに対する懸念もあった^{xxii}。

以上でみたように、アメリカ社会が抱えていた貧困や格差、移民のアメリカ社会への適応といった諸問題を教育が解決すると期待されたこと、さらに、小学校への適応のために幼稚園が有益であり、将来の労働者として期待される効率性の高さが評価され、幼稚園が小学校に併設される制度が拡大していったのである。こうした観点からみれば、小学校への適応が問題視されている日本への示唆として、アメリカを参照する重要性は一定程度認められよう。ただし、当時の幼稚園設立運動家が懸念したように、幼稚園教育の独自性が削られるという懸念もまた、念頭に置かねばならないだろう。

(早坂めぐみ)

3. 調査の概要

3-1. 調査の目的

本調査の目的は、アメリカ・マサチューセッツ州の公立小学校（A小学校）におけるKindergartenとFirst Gradeの教室環境の比較を通して、子どもの小学校への適応に関する環境面での工夫を明らかにすることである^{xxiii}。環境面とは、教室（クラスルーム）の空間の使い方や、掲示物を指す。本調査を足がかりとして、将来的には日本とアメリカの小学1年生の学校生活を比較することで、新たな学校段階に参入する子どもが学校生活に適応していくための学校環境や教師の実践を検討することが可能となる。これにより、日本におけるいわゆる「小1プロブレム」の解決に向けての研究的な貢献が期待できる。

調査に際しての研究倫理への配慮として、事前に校長（principal）に調査依頼を行い、写真の撮影と音声の録音の許可を得た。調査当日は、校長と調査目的や内容に関する確認を行い、写真撮影が不可の生徒を撮影しないよう細心の注意を払って調査を行った。なお、本稿では、生徒の顔写真の掲載を避けている。本稿を公表するにあたっては、校長から写真の公表についての許可を得ていることを付記しておく。

本稿は、調査者による記録のうち、写真およびフィールドノートをもとに構成する。

(早坂めぐみ・越川葉子)

3-2. 訪問校の概要

マサチューセッツ州に位置するA公立小学校への訪問は、2019年3月21日に行った。2019年現在、同校の在籍者数(enrollment)は431名、学年構成(Grade served)はK-5(KindergartenからFifth Grade)である。人種とエスニシティ(Students race and Ethnicity)は、African American 0.5%、Asian 9.5%、Hispanic 2.3%、Native American 0%、White 79.6%、Native Hawaiian, Pacific Islander 0%、Multi-Race, Non-Hispanic 8.1%となっており、圧倒的にWhiteの割合が高い公立小学校といえる。

観察した教室の内訳は、Kindergartenが3クラス、First Gradeおよび Second Gradeが2クラスずつであった。

(越川葉子)

4. 考察

4-1. 1クラスの児童数と教師の数

観察した学年はいずれも生徒数が1クラス20名前後であった。KindergartenとFirst Gradeは、担任の教師の他にSupport Teacher(以下、STと表記)1名が教室に入っていた。授業の進行は担任の先生で、子どもたちとのやりとりは担任の先生が行っていた。Readingの授業では、Kindergarten、First Grade、すべてのクラスで、領域の専門教員1名が教室に入って子どものサポートに携わっていた。担任が授業中にSTに指示を出すことはなく、STは慣れた様子で子どもたちの様子を見回りながら、子どもと一緒に本を読むなどしていた。また、課外活動やLunch Roomへの移動の際には、STが子どもたちの先頭に立って引率をしていた。子どもたちが教室の外の活動に参加している間、担任は教室に残っていた。校長先生から頂いたスケジュールに担任の名前と教室番号(Room No.)が記載されていることから、担任と教室が紐づいており、「教室運営者としての担任」という役割が強く反映されていた。

(越川葉子)

4-2. 教室空間の活用方法

校舎はレンガ造りで歴史を感じさせる重厚な建造物であるが、2003年にリノベーションされている。Kindergartenの教室は1st Floorにあり、First GradeとSecond Grade、Third GradeはSecond Floorに、音楽室や美術室、Lunch Roomは地下1階に集約されていた。

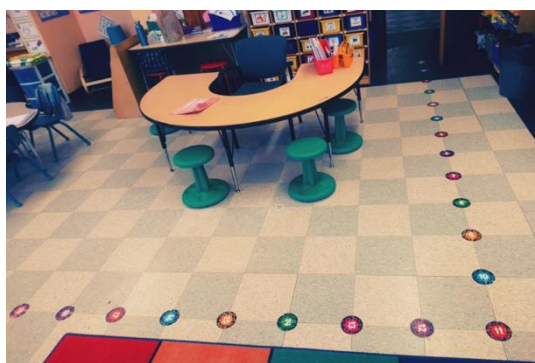
教室は、日本と比べてかなり広く感じられた。こうした調査者の感覚は、日本との教室

空間の構成のされ方の違いから生じていると思われる。まず、教室には、机が配置されたスペース、カーペット敷きのスペース、ロッカースペースなど、いくつかの活動空間が用意されていた。教師は子どもたちの活動内容に応じて活動空間を変えており、子どもたちも教師の指示に応じて教室内を移動しながら授業を受けていた。また、壁面にはクラス目標や子どもたちの誕生日、制作物、家族写真など多種多様な掲示物で埋め尽くされていた。

その中でも Kindergarten の教室は、他の Grade では見られなかった教室空間が採用されていた。まず、手洗い用の水場やトイレ (restroom)、ロッカーが教室内に設置されており、子どもたちの主な活動が教室内に収まるような空間設計になっていた。また、写真 1 の床面の番号表記は Kindergarten の教室で見られたが、First Grade と Second Grade の教室には見られなかった。Kindergarten の子どもたちは自分の番号 (No.) を把握しており、教室移動する際に自分の番号の上に立って整列していた。

また、クラス内の役割についても、番号ごとに一つの「Job」が割り当てられていた。この「Job」は一週間ごとに変わり、「Job」がない子どもには休憩 (「vacation」) が割り当てられていた。さらに、Kindergarten の教室の壁面には、「Our Family Tree」という表題のついた一本の木が描かれた掲示物があり、その枝の先に子どもたちの家族写真が飾られていた。担任によれば、子どもたちが寂しくならないようにとの配慮から家族写真を飾っているとのことであった。

【写真 1 教室床面に記された番号、Kindergarten】



教室の入り口から直線上にカラフルな番号が描かれている。この番号は床にペイントされていて、消すことはできない。たとえば、ランチルームへの移動の際には、子どもたちは自身の番号の上に立つことで、自然と整列することができる。したがって、この番号は整列の補助のための印である。

【写真 2 役割活動 (Classroom JobsやHELPERS)、ともにKindergarten】



役割活動は「Classroom Jobs」や「HELPERS」のタイトルで掲示されている。同じ学年であっても、掲示物のアレンジはクラスによって異なっているが、いずれも誰がどの役割の担当であるかが一目で分かるように工夫がされている。具体的には、カレンダー係、天気報告係、スケジュール確認係、プリント配布係、整列係、列の最後尾に並ぶ係、図書係、学校に来て何日目かを知らせる係などが見られた。

子どもたちの机は、Kindergarten、First Grade、Second Grade のいずれも 3 名～4 名

のグループで配置されていた。Kindergartenの教室の机の上にはネームプレートが置いてあったが、固定されてはいなかった。First Grade、Second Grade の教室では、ネームプレートが貼り付けられており、自分が座る机と椅子が明確になっていた。しかし、KindergartenとFirst Gradeでは、グループ活動やパートナーリーディング (Partner Reading) をする際に、子どもたちは思い思いの場所を選択しており、「自分の座席で授業を受ける」といった認識はあまり明確ではないように見受けられた。

そして、調査者の目に最も新鮮に映ったのは、今回の訪問で見学した 3 学年、すべての教室にカーペットが敷いてある空間が設けられていたことであった。このカーペットの様には学年ごとの特色が見られた。KindergartenとFirst Gradeのカーペットは 5 列、5 色に色分けされていて、さらに各色が 6 マスに区切られていた。どの色のどこに誰が座るかは決まっており、担任がカーペットに集まるよう指示を出すと、子どもたちは自分から決められた場所に座っていた。

【写真 3 5 色×6 列のカーペット, Kindergarten】



担任の指示に従って、カーペットの上に集まる場面では、子どもたちは混乱することなく、一人一マスに座っていた。どのマスに誰が座るかは決まっており、一週間毎に変わるという。

一方、Second Grade の教室では、子どもたちが床に座ることのできる空間は用意され

ているものの、カーベットは一色であったり、家庭で使っているような柄物のカーベットであったりと担任の裁量に任されているようであった（写真4）。また、KindergartenやFirst Gradeのように、子どもたちが指定された場所に座るといった使い方はされておらず、課題が終わった子どもが自由に過ごしてよい場所として用いられていた。子どもたちは、カーベットの上で寝転がって本を読んだり、あぐらをかいて座ったりと、思い思いの姿勢でくつろいでいた。

【写真4 単色のカーベットと座椅子、Second Grade】



課題が終わった子どもは、教室後方のこのスペースに移動し、自由に過ごしていた。寝転ぶことも、あぐらをかくことも許されており、生徒がこのスペースでどのような姿勢でいても、担任は注意しない。

（早坂めぐみ）

4-3. 教室内の備品類

KindergartenとFirst Gradeの教室では、一人ひとりに名前が貼り付けられたBoxが用意されていた（写真5）。Kindergartenでは、このBoxに授業で使ったワークシートなどが収納されており、窓際の棚の上に置いてあった。First Gradeでは、子どもが授業に必要な物をこのBoxに入れて持ち運んで使っていた。子どもは授業に必要な物をBoxに入れて持ち運びができるため、授業中の居場所に柔軟性が出ているように思われた。つまり、学習の場が自分の机に居場所が限定されないことを意味している。

他方、Second Gradeになると、机が日本と同様のタイプになり、机の中に教材をしまうことができるようになっていた。授業で使う大きなバインダーを子どもたちは教師が指示したタイミングで机の中から取り出して使っていた。自分の机と椅子が明確になるはSecond Gradeからであるとの印象を受けた。

【写真5：子ども一人一人のBox, Kindergarten】



Boxには、子どもの名前と番号がセットで示されている。子どもたちはこのボックスをもって、思い思いの場所で学ぶ。学習の場が限定されず、その日の気分や各自の居心地の良い場所を選ぶことができる。

今回観察したすべての学年の教室には、ホワイトボードが設置されていた。ホワイトボ

ードの上にはプロジェクターが設置されており、教師は絵本やワークシートをホワイトボードに投影して子どもたちが見えるように使っていた。教科書はないため、教師がホワイトボードに投影した絵本や写真、ワークシートなどがその授業の教材となる。KindergartenやFirst Gradeのホワイトボードは掲示物が貼られているスペースが多かった。空いたスペースには、その日の授業の課題がホワイトボードに記されていた。Second Gradeになると、担任は授業の進行に合わせてホワイトボードにキーワードなどを書き込み、その教師の書き込みを子どもたちが見て、手元のプリントに書き写すといった指導方法がとられていた。

(早坂めぐみ)

4-4. クラスのルールの比較

教室の掲示物のひとつとして、そのクラスのルールが書かれた掲示物がある。そのルールの名称として、「Class Charter (クラス憲章)」や「Classroom Rules (クラスルームのルール)」といった言葉が用いられており、教室の壁に掲示されている。このルールを見ることにより、教師がクラスの生徒たちに期待するクラスでの過ごし方や人間関係のあり方、つまり、教室における規範の中身が読み取れる。ここでは、KindergartenおよびFirst Gradeの2学年の各2クラスのクラスルールの写真を参照し、書かれている内容について見ていく。写真を参照し、大文字や小文字などの英語の表記も忠実に書き起こし、日本語訳をカッコ内に記した。

まず、Kindergartenにおける2クラスのクラスルールについてである(写真6)。aは「Class Charter」(クラス憲章)として、次のように書いている。

Class Charter (クラス憲章)

In Kindergarten we want to feel… (キンダーにおいて、私たちは次のように感じたい)

Happy (幸せであること)

We can share. (私たちは分かち合える)

We can smile. (私たちは笑顔になれる)

We can give hugs. (私たちはハグをしてあげられる)

Comfortable (心地よいこと)

We can talk to people. (私たちは友達と語り合える)

We can be kind. (私たちは親切になれる)

Welcomed (受け入れること)

We can be kind. (私たちは親切になれる)

We can listen to each other. (私たちは互いに聞き合うことができる)

Safe (安心できること)

We can play nicely. (私たちは楽しく遊ぶことができる)

We can keep our hands to ourselves. (私たちは手を取り合うことができる)

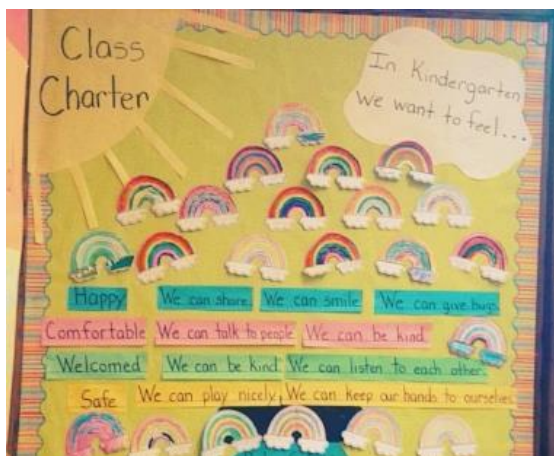
次に、bを参照しよう。

Classroom rules (教室でのルール)

- 1.Walk (歩く)
- 2.Follow Directions (指示に従う)
- 3.Be Respectful (尊敬のきもちを持つ)
- 4.Have a Safe Body (安全に気をつける)
- 5.Raise Your Hand (挙手をする)
- 6.Clean-up Your Things (整理整頓する)
- 7.Use Indoor Voices (小さな声で話す)
- 8.Say Good Things (良いことを言う)

【写真 6 クラスルールが書かれた掲示物 (2枚とも Kindergarten)】

a.



b.



写真 6 として、Kindergartenのaおよびbの 2 クラスのクラスのルールを紹介した。aは教室で過ごす子どもたちの情動に関する内容であるのに対し、bは簡潔な命令文で行動規範が書かれている。これらの 2 クラスは、同じ学年であるにもかかわらず、教師が求めるクラスのルールは統一されていない。むしろ、その教師の意向や理想のクラス像を反映していると見ることができる。本稿 4-1 で見たように、「教室運営者としての担任」の意向が色濃く現れており、それが許される環境であることもまた読み取れる。

次に、First Gradeにおける 2 クラスのクラスのルールについてである (写真 7)。

aのルールには表題はないものの、3枚の画用紙に以下の 3 点を挙げている。

- 1.Be Safe (安全に過ごすこと)
- 2.Be Kind (親切にすること)
- 3.Take Care of the Classroom (教室を大切に)

さらに、4 枚目には、

We, the First Graders of Room 202 agree to (1 年生の 202 教室で過ごす私達は以下に同意します)

- 1.Be Safe (安全に過ごすこと)
- 2.Be Kind (親切にすること)
- 3.Take Care of the Classroom (教室を大切にすること)

とあり、クラスの生徒のサインも掲示されている。サインをさせることには、一人ひとりが同意したうえでルールを守るという誓約の意識が見て取れる。

他方、別のクラスであるbの「Classroom Rules (クラスルームのルール)」には生徒のサインは見られない。内容は以下の通りである。

Classroom Rules

- ①Listen & Follow Directions (よく聞き、指示にしたがう)
- ②Raise your hand before Speaking or leaving your seat (発言や離席の前には挙手をする)
- ③Keep your hands, feet, & objects to yourself (ちょっかいをだしたり、自分の持ち物を散らかしたりしない)
- ④Be kind to your classmates, & classroom teacher (クラスメートにも先生にも優しくする)
- ⑤Work hard & Do your best each day (まじめに取り組み、日々ベストを尽くす)

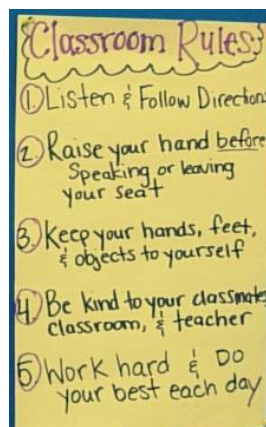
First Gradeのbクラスのルールは、aと同様に命令文の形をとっているが、aよりは具体的な内容となっている。しかし、生徒にサインを求めるか否かについては、aとbとで異なっている。以上のことから、First Gradeの2クラスにおいても、Kindergartenの2クラスと同様、同一学年であってもクラスのルールが統一されておらず、それぞれのクラスの担任の意向やクラス像を反映していると考えられる。

【写真 7 クラスルールが書かれた掲示物（2枚とも First Grade）】

a.



b.



(早坂めぐみ)

5. 結論と今後の課題

本研究は、アメリカの公立小学校における Kindergarten と First Grade の教室環境の比較を通じて、幼児教育段階から小学校教育段階への適応の工夫について検討した。

日本においては、生活科が小学校低学年に設定されるなど、教育内容の面での幼児教育と小学校教育との接続が試みられてきた。しかし、教室環境についての検討はあまりなされてこなかっただろう。他方、アメリカに目を移せば、小学校教育のなかに幼児教育段階の「kindergarten」の機能を含みこむ制度を有するばかりでなく、観察から「kindergarten」と「first grade」の教室環境の異同が明らかとなった。たとえば、First Grade と異なって Kindergarten には 1) 教室内にトイレが設置されている、2) 教室の床には移動の際に整列するための目印となる表示がある、3) 家族の写真が掲示されているといった点である。これらには、子どもが学校生活に適応するための配慮が見て取れるのである。上記はそれぞれ 1) 排泄、2) 整列という集団行動、3) 家族から離れる子どもの不安感への配慮という意図が読み取れる^{xxiv}。

クラスルールの内容に関しては、Kindergarten と First Grade による明確な差異は見られず、それぞれのクラスで異なっていた。こうしたことから、個々の担任教師のクラスに対する考え方—思想といっても良いだろう—が各クラスのクラスルールに反映されていると見るべきであろう。クラスルールの検討から、教師が自身の教育思想を子どもに伝える自由が認められているということが透かし見える^{xxv}。

以上より、アメリカの小学校の観察から、生徒に認められている自由と、担任教師に認められている自由が垣間見られた。環境への適応に関する課題の大きさは、その環境におけるルールの縛りの強さによって左右される。日本における「小 1 プロブレム」の解消、

緩和について考える場合、日本の学校におけるルールを改めて問い直すべきであろう。ルールとは明文化されたルールのみならず、暗黙のルールも含む。本稿からの示唆として、子どものスムーズな学校適応に向けての環境面での工夫—本稿が示したような、整列のためのマーク、教室内での子どもの学びの場を座席以外にも確保するといったこと—のなかでも取り入れやすいものについては、具体的に小学校に導入していく価値があると考えられる。

ここまで、本稿では教室環境の構成を重点的に検討してきたが、教室空間の構成は授業実践にも影響を与えるものである。筆者らが見学した際にも、Kindergartenの担任教師は教室内の移動と活動の切り替えを同時に行なっている様子が見られた。つまり、教室空間は日本よりも柔軟な使用が可能であるように見えても、いつ、どの空間を使用するのか、その空間内でどのような振る舞いが許容されるのかは、担任教師の裁量によるのであって、子どもたちはそうした許容の範囲を授業場面や学校生活を通して身につけていっていると考えられる^{xxvi}。では、Kindergartenの子どもたちはどのように身につけていくのか。今後のさらなる観察と実践の検討が必要であろう。

なお、筆者らは日本において、幼稚園を小学校の準備のためのステップとして位置づけることを主張しているのではない。アメリカの幼稚園運動家が一時懸念していたように、幼稚園には幼稚園の独自の価値がある。日本においては、幼稚園と小学校が別個に存在することから、幼稚園教育の独自性を担保しつつ、小学校への適応がスムーズであるようにいかなる工夫が可能かを考えていくことが重要である。

(早坂めぐみ・越川葉子)

【引用・参考文献】

- アメリカ教育学会, 2010, 『現代アメリカ教育ハンドブック』東信堂。
- 北澤毅, 2011, 「『学校的社会化』研究方法論ノート—『社会化』概念の考察」『立教大学教育学科研究年報』54, pp.5-17.
- 松尾知明, 2010, 『アメリカの現代教育改革—スタンダードとアカウンタビリティの光と影』東信堂。
- Mehan, Hugh., 1979, *Learning lessons: Social Organization in the Classroom*, Harvard University Press
- 三品陽平, 2017, 「幼保小連携カリキュラムの基礎研究」『現代教育学部紀要』第9巻, pp.1-11.
- 宮本健市郎, 2018, 『空間と時間の教育史—アメリカの学校建築と授業時間割からみる』東信堂。
- 文部科学省, 2016, 『諸外国の初等中等教育』明石書店。
- 西山久子, 2018, 「第4部第1章 アメリカ合衆国の学校運営・学校事務体制」『世界の

学校と教職員の働き方』学事出版, pp.212-220.

上野辰美, 1995, 『アメリカ幼稚園教育の公共育性発展過程に関する研究』風間書房。

白井博, 2001, 『アメリカの学校文化 日本の学校文化ー学びのコミュニティの創造』金子書房。

山本律子, 1986, 「『子供時代』の制度化ーアメリカの幼稚園運動, 1870ー1914ー」長崎大学経済学会『経営と経済』66(3), pp.299-327.

i 2012 年度の幼稚園・保育学校の在籍率による (文部科学省、2016、p.39)。

ii 三品 (2017) によれば、アメリカにおいて移行期の問題は、「kindergarten」と就学前教育の接続問題 (preschool-kindergarten transition) として注目されている。

iii 本稿の関心は、幼児教育段階を経て、すでに一定の社会化が達成された就学前の子どもたちが、小学校の＜児童になる＞過程を「学校的社会化」と概念化した北澤 (2011) の研究から示唆を得ている。

iv Mehan、1979、p.8.

v 文部科学省、2016、p.38.

vi 外務省「諸外国・地域の学校情報」(平成 29 年 12 月更新情報) のアメリカ合衆国 (マサチューセッツ州) を参照。

https://www.mofa.go.jp/mofaj/toko/world_school/03n_america/info30118.html

(最終閲覧日 2019 年 10 月 28 日)

vii アメリカの学校年度は、一般的には 9 月上旬から 6 月下旬までである。

viii 西山、2018、p.212.

ix 同上.

x 文部科学省、2016、p.42.

xi 文部科学省、2016、p.352.

xii 山本、1986、p.300.

xiii 上野、1995、pp.38-39、p.67.

xiv アメリカ合衆国は建国以来、アングロサクソンの要素が強く支配しており、これが文化の主流を築いていた。16 世紀にヨーロッパからアングロサクソンをはじめとする白人移民が大量に移住して以降、18 世紀には奴隷貿易による黒人の大量移住、1840 年代には西欧・東欧・南欧系の移民が、1860 年代にはアジアから中国系、日系の労働移民が移住した (上野、1995、pp.32-33)。

xv 上野、1995、p.72.

xvi 上野、1995、p.87.

xvii 上野、1995、pp.106-109.

xviii 山本、1986、pp.306-307.

xix 山本、1986、pp.313-314.

xx 山本、1986、pp.318-319.

xxi 山本、1986、p.319.

^{xxii} 山本、1986、p.318.

^{xxiii} 筆者らの関心は、A 小学校における Kindergarten と First Grade の教室環境の比較にあるが、当日校長のご厚意により、Second Grade の教室や授業を見学することができた。また、学校全体の教室の配置等についての説明も受けた。本稿のなかで Kindergarten および First Grade 以外の学年に関する記載も一部あるが、それらは見学の記録によるものである。なお、A 小学校に関する学年の表記は、当日学校よりいただいた資料の表記に統一している。

^{xxiv} こうした教室空間の構成は、「家庭らしい環境」(宮本 2018, p.37)を教育実践にも反映させた進歩主義教育の影響とも考えられる。

^{xxv} ただし、本調査では、これらのクラスルールがどのように決定され、運用されているかまで観察することはできていない。この点については、ルール違反が観察されうる場面の観察など、よりミクロな場面の検討が必要であろう。

^{xxvi} Kindergarten および First Grade の教室には、その日の時間割が掲示されていたが、明確な時間の区切りを実感することがなかった。教師の指示により子どもたちは活動の体型を変えており、時間編成についても、今後の検討が必要であろう。